

四日市公害 Q&A その1

公害を記録する会によせられたもの

1. しょうわ石油が海軍燃料しょうを買い受けたとき、四日市の人たちは反対しましたか？
2. 四日市にたくさんの工場が立ち、コンビナートができたとき、四日市の人たちは反対したのですか？
3. 「高度経済成長」を行っていた当時の総理大臣のことをどう思っていましたか？
4. コンビナートが広がってどんなことが起こりましたか？
5. 四日市ぜんそくが広がっていたとき、四日市の空はどんな様子でしたか？
6. 四日市ぜんそくが広がったとき、四日市の海はどんな様子でしたか？
7. 四日市の空にコンビナートの煙が広がったとき、どう思いましたか？
8. 煙突の高さはどれぐらいでしたか？
9. 四日市ぜんそくが広がっていたとき、工場はそのことに気づいていましたか？
10. ぜんそくが広がっていたとき、毎日どんな気持ちでしたか？
11. 工場や周りの人たちからいろいろ言われて、どんな気持ちでしたか？
12. ぜんそくが出たとき、病院ではどんなことをしましたか？
13. 当時のかん者さんはどれくらいいましたか？
14. ぜんそくのとき、外へ出てもらいたいようぶだったのですか？
15. 四日市ぜんそくにかかった人は何人ぐらいいましたか？
16. 四日市以外でぜんそくにかかった人は何人ぐらいいましたか？
17. 四日市ぜんそくにかかって、何回ぐらい病院へ行きましたか？
18. 四日市ぜんそくにかかって、つらかったことはどんなことですか？
19. 四日市ぜんそくで亡くなった人は何人いますか？

1. しょうわ石油が海軍燃料しょうを買い受けたとき、四日市の人たちは反対しましたか？

反対しませんでした。空しゅうで焼け野原になっていたあと地に、平和産業の工場が作られるといいのになと思っていました。どの会社へあと地を売るのかは、国の土地でしたから政府が決めました。

2. 四日市にたくさんの工場が立ち、コンビナートができたとき、四日市の人たちは反対したのですか？

第1〔塩浜〕と第2〔橋北〕コンビナートが作られるときは、ひどい公害にいたみつけられるということは知りませんでした。だから、このときは、反対しませんでした。ただ、第2コンビナートが作られるとき〔1963年運転開始〕には、塩浜ぜんそくなどで第1コンビナートの近くの人たちが苦しめられていることを知っていました。

それで、住宅地に近いところにはプラントは建てませんと大協石油〔現在コスモ石油〕の所長が約束をしていました。ところが、プラントを建ててしまったので、付近の住民が約束がちがうと工場へ行くと、「前の所長が約束したことで、私は知らない」と、住

民の言い分は聞き入れられませんでした。

3. 「高度経済成長」を行っていた当時の総理大臣のことをどう思っていましたか？

石油化学コンビナートという産業は、日本の高度経済成長にとって大きな役割を果たしました。それによって国民の生活がよくなるのであれば大変によいことだと思いました。また、それを言い、その政策を進めた総理大臣はりっぱだと思いました。

四日市でも、そうした国の言うことにしたがって、市長が「工場がくれば市は発展するから住民は協力しなさい」と言いました。

市が発展するならよいことだと、住民は反対せずに協力しました。ところが、塩浜で、特に、漁師たちの磯津では、油くさい魚がとれ、売り物にならないとこまりはてていました。

4. コンビナートが広がってどんなことが起こりましたか？

原因不明の【塩浜ぜんそく】と呼ばれる病気が出始めました。第2コンビナートが運転をはじめた1963年以降は、発病地区が広がって【四日市ぜんそく】にかかる人（お年よりと子供が多い）が増えました。

磯津の漁師が「工場がきたので、税金がたくさん入り、市は発展したかもしれないが、市民のわしらは、ぜんそくにかかり、漁にも行かれず、入院せんならん」となげいていました。

5. 四日市ぜんそくが広がっていたとき、四日市の空はどんな様子でしたか？

霧のような、少し先も見えにくいようなスモッグが立ちこめることがよくありました。夜、鈴鹿の山々のほうから四日市をながめると、四日市の町がすっぽりとガスのかさでおおわれているのがよくわかりました。町中では見えない星も、山のほうで空をながめると、たくさんの星が見え、星ってこんなにたくさんあるものかと思ったことがあります。

6. 四日市ぜんそくが広がったとき、四日市の海はどんな様子でしたか？

第1コンビナート（内陸もふくめ）工場はいちは、四日市港へ流されます。生物ゼロといわれるほどの汚い海になり、七色といえきれいな虹を想像しますが、どろどろした色、油が浮くなど、海のおいのしない悪臭の海でした。

中部電力三重火力発電所は、その海水を発電機を冷やすのに使ったあと、反対側の鈴鹿川へ流したので、磯津近辺の魚がくさくなる、奇形になる、いなくなるなどのようなことがありました。

磯津の漁師たちが鈴鹿川へ流さないでほしいとうったえましたが、聞き入れてもらえませんでした。

7. 四日市の空にコンビナートの煙が広がったとき、どう思いましたか？

ぜんそくが出始めたころから、煙の中にふくまれている亜硫酸ガス（二酸化イオウ）が、ぜんそくを引き起こす悪いガスと知られるようになりました。

「えんとつにふたをしてやりたい」と作文に書く小学生もいました。

8. 煙突の高さはどれぐらいでしたか？

1955年に石炭を燃料として運転をはじめた三重火力発電所の煙突は、57.3メートルで、その後で作られた昭和四日市石油などはこれよりもひくい煙突でした。（1963年に運転をはじめた四日市火力は、最初から120メートル）

1963年秋、国の調査団が四日市へきて、煙突をもっと高くしなさいといました。それで、1965年ころから各工場とも100,120,150,200メートルと高い煙突をつくり、ガスを広い地域にばらまくことによって、工場に近いところをうすくするようにしました。しかし、工場から出すガスの量をへらさなかったため、このことがかえって、ぜんそくを広めることにもなったのでした。

9. 四日市ぜんそくが広がっていたとき、工場はそのことに気づいていましたか？

もちろん気づいていました。工場で働いている人やその家族がぜんそくにかかって医者に行くと、健康保険の請求が工場にきます。1965年から四日市市は、公害病認定制度を発足させ、四つの病名〔気管支ぜんそく、ぜんそく性気管支炎、まん性気管支炎、肺気腫〕の病気にかかった人を公害病患者と認めました。そして、医者代を四日市市がはらいました。しかし、工場で働いている人やその家族は、その病気になっても、公害患者とみとめられようとはしませんでした。

10. ぜんそくが広がっていたとき、毎日どんな気持ちでしたか？

私は、第2コンビナートのほうの橋北地区〔公害汚染地区〕に住んでいました。2人の子供のうち1人が、ぜんそくみたいな病気になり「この子は、空気のきれいなほうへ行けばなおる」と医者に言われ、山の手団地へ引っ越し、元気になりました。ぜんそくは他人事ではなく、漁をして働いている磯津の漁師とか引っ越すことができない事情がある人たちは大変だな、気の毒だなと思いました。それとともに、そうした苦しみを与える公害をなくす運動をしなければと思いました。

11. 工場や周りの人たちからいろいろ言われて、どんな気持ちでしたか？

塩浜小学校3年生の女の子のお母さんは、「ぜんそくの発作は夜中から明け方に起こり、『苦しい』『死にたいわ』と言って、いっしょうけんめい息をし、おさまるところにはぐったりとつかれてしまいました。朝、起こして、学校へ行きなるとは、よう言わんで休ませてしまうと、近所では、その苦しみがわからぬので、あそこの子は休むするって言う。それが本当につらい。」と、1970年ころ、しきりにこぼしていました。

12. ぜんそくが出たとき、病院ではどんなことをしましたか？

磯津〔650戸ほど〕では、中山医院というご夫妻で医者をしているところがあり、昼でも、夜中でも、治療をしていました。お医者さんは大変な毎日でした。治療は、注射、吸入、点滴などの応急処置をして、発作を少しずつ減らしてくれました。県立塩浜病院では、夜中に発作を起こしてかけこんでくる患者さんがわかっていました。だから、その人たち

のカルテを夜間受付の守衛所に置いておき、患者さんにそのカルテをわたし、当直の医者にみてもらいました。なかには、医者へ行くことができないくらい発作に苦しむ患者さんもいました。そんなときは、本当はいけないことですが、自分で注射器と注射液を買ってきて、自分で注射をしていました。

13. 当時のかん者さんはどれくらいいましたか？

1972年〔昭和47年〕は、公害裁判の判決のあった年ですが、そのころ――

塩浜小学校	56人	三浜小学校	37人	四日市の全小学校	194人
塩浜中学校	11人			四日市の全中学校	32人
塩浜地区	249人（うち磯津102人）			橋北地区	106人
日永地区	78人				
全地区	750人			指定地域外	67人
					計817人

6から8才 116人 60から64才 70人 65才以上 165人

14. ぜんそくのと看、外へ出てもだいじょうぶだったのですか？

ガスでおそわれなにかぎりは、だいじょうぶとまではいきませんが、まあ、健康の人と見かけは変わりません。

塩浜病院に入院していた漁師の患者さんは、朝早く、伊勢湾の沖合いへ漁に出かけます。ガスがこないかぎり一日働いていて、夜は病院〔空気せいじょう病室〕で寝ます。外へ行くときは必ずとっていいほど、ぜんそく止めのけいたい用吸入器を持っています。

15. 四日市ぜんそくにかかった人は何人ぐらいいましたか？

公害認定患者の年度別数でいくと、1975年（昭和50年）1140人でピークとなっています。この数は、新規患者数、認定取り消し、死亡者数などの現在数ですから、認定になった患者数はこれよりもずっと多い。また、認定を申しこまなかった患者もいるわけで、もっともっと多くの人数になります。

16. 四日市以外でぜんそくにかかった人は何人ぐらいいましたか？

市外から四日市のコンビナートや汚染地区の工場、事務所などへ働きにきていた人も、3年以上の期間があれば、認定してくれます。1972年には、6人の通勤者が認定になっていました。

17. 四日市ぜんそくにかかって、何回ぐらいい病院へ行きましたか？

これは何回とは答えられません。患者さんの症状などによってですが、患者を何年も経験すると、自分の体の調子がわかるようになり、ほっさが出そうだと予感すると、薬を飲む、吸入をするなどで、病院へ行かなくてもすむことがあったようです。

18. 四日市ぜんそくにかかって、つらかったことはどんなことですか？

四日市ぜんそくになってみないことには本当のつらさは、わからないと言います。患者の小学生が発作が起きて苦しむと、たんすやふすまをひっかいたり、しがみついたり、「かあちゃん、殺して！」「死にたいわ」と苦しみます。つらいことを乗り越えています。

また、ぜんそくがうつるであの子と遊んだらいかんと、友達のお母さんがその子に言ったり、『セキゴン』とともにだちにからかわれることもありました。

大人の場合でも、入院患者がベットから落ち、『助けてくれ』って一言いって死んでしまいました。

ある人が「悪いこともしてないのに、なぜ、助けてくれって死なんならん、わしもそんな目にあうのかと思うと情けなくなる」となげいていました。

19. 四日市ぜんそくで亡くなった人は何人いますか？

公害病認定患者で亡くなった人は 600 人ほどいますが、全部の人がぜんそくでということではなく、他の原因で亡くなった人もいます。

なかには、自殺した人(4人ほど)もいます。

中学生 1 人、小学生 3 人が、ぜんそくの発作でなくなっています。

四日市公害 Q&A その2

1. 裁判をしようとしていた人たちはどんな仕事をしていましたか？
2. 最後まで裁判をしたのは、何人ぐらいですか？
3. 裁判に協力した人は何人ぐらいですか？
4. 当時に四日市の人口は、何人ですか？
5. 青空バッチを買ってくれた人はどれぐらいいましたか？
6. ぜんそくのほかに「公害」で困ったことはありますか？
7. 動物や植物は、四日市ぜんそくが広がっていたとき、どんな様子でしたか？
8. 裁判に取り組んでいるとき、うれしかったことはありましたか？
9. 裁判に取り組んでいるとき、いやだったことはありますか？
10. 公害について、支援者の人たちと勉強などしましたか？
11. 今もぜんそくに苦しんでいる人はいますか？また、患者さんは何人ぐらいいますか？
12. 四日市ぜんそくは、公害がなくなったらなおるのですか？
13. 四日市ぜんそくの薬などはあるのですか？酸素吸入器がないとどうなりますか？
14. 今と当時を比べて、空気はどれくらい違いますか？きれいになりましたか？
15. いまも煙突から出ているけむりは、だいじょうぶなのですか？
16. コンビナートのタンクの中にはなにが入っていますか？
17. 今も四日市では環境保全は続いていますか？市役所としては何かしていますか？
18. いまは、ぜんそくにかかる心配はありませんか？
19. 工場の人もぜんそくにかかったのですか？

1. 裁判をしようとしていた人たちはどんな仕事をしていましたか？

漁師 3 人、船大工 1 人、八百屋 1 人、家事手伝い 4 人

当時〔1967 年〕塩浜病院の空気せいじょう室には、公害認定患者が 24 人いました。多くの人が裁判の原告になると言っていました。結局、代表として 9 人を選びました。

2. 最後まで裁判をしたのは、何人ぐらいですか？

裁判の途中で元漁師一人と、一番若い女のひとがなくなりましたが、家族が原告を引き継ぎ、子供や夫が助け合い、原告の数は 12 人〔公害病患者は 7 人〕となりました。

3. 裁判に協力した人は何人ぐらいですか？

裁判が始まったころ、「公害訴訟を支持する会」というのが作られ、年会費 1 人一口 100 円でした。4000 人ほどの人がこれに協力しました。その大部分は、全国の市町村や県などの人たちと、全国の小、中、高校の先生たちでした。

4. 当時に四日市の人口は、何人ですか？

1971 年現在、2 3 3 1 4 4 人 世帯数 6 0 2 4 6

5. 青空バッチを買ってくれた人はどれぐらいいましたか？

2 0 0 0 人以上はいたと思いますが、はっきりした数はわかりません。判決後、(1972 年 7 月) 半年くらいまでは売っていました。1 個 100 円でした。

6. ぜんそくのほかに「公害」で困ったことはありますか？

悪臭（あくしゅう）〔たまねぎのくさったようないやなおい〕で頭がいたくなったり、気分が悪くなったりしました。いまでも、以前よりはへりましたが、悪臭はあります。

工場のすすでせんとくものが汚れたり、布団が干せなかつたりしました。付近住民は、「家にビニールのとたんなどのおおいをつけてくれ、すすを出さないでくれ」と、火力にお願いに行きました。しかし、その返事は、「すすを完全になくすことはむづかしい。梅雨期には発電量を半分ないし 3 分の 1 にするので、その分だけはすすの被害も少なくなる。せんとく物を干せない家は火力の中に乾燥室を作って、そこで乾燥する」（1964 年 4 月）ということでした。結局、住民は自分たちで、のきさきにおおいを作りました。

7. 動物や植物は、四日市ぜんそくが広がっていたとき、どんな様子でしたか？

動植物にとっても大気汚染は悪いえいきょうをあたえていました。動物をかいぼうしてみたら、はいがやられていました。コンビナートが風上の季節風のときは、ほうれん草は育たないとか、稲がよく育たないとか、ナスの花がさいていても実がならなかったといったときがありました。

このことは、三重大学の農学部、医学部の研究でわかりました。

8. 裁判に取り組んでいるとき、うれしかったことはありましたか？

支援者としてですが、裁判を聞きにくる人がたくさんきたときとかがうれしかったですが、うれしいと思う以上に、いろいろたいへんなことの連続でした。

9. 裁判に取り組んでいるとき、いやだったことはありますか？

裁判を聞く人〔応援者〕が少なかったり、会社側の証人がうそだとか、いいかげんなことばかりを証言したときがいやだった。

10. 公害について、支援者の人たちと勉強などしましたか？

二次訴訟をやって、青空をとりもどそうと、磯津の子供、母親たちが中心になって、名古屋大学の学生や小学校、高等学校の先生などと「反公害磯津寺子屋」とか、「公害市民学校」などで勉強しました。

第2コンビナート近くの橋北地区の患者の会も、学生や先生たちと勉強会を持ち、コンビナートの工場側と青空要求をかかげて話し合いをしました。

11. 今もぜんそくに苦しんでいる人はいますか？また、患者さんは何人ぐらいいますか？

昔ほどではないですが、苦しんでいる人はいます。公害ぜんそくのほっさは、四日市を離れると、発作をしなくなったり、へったりするということです。

ひどい発作を起こしていた人が、家族旅行で2泊3日、四日市を離れたらぜんぜん発作が起きず、持っていった吸入もせずすみ、帰ってから1週間は発作が起きなかった、という人がいます。どんよりしたお天気の日は、よくないようです。

認定患者は現在〔1998年7月〕612人おります。

ぜんそくが治るということでは、中学生にもなると体力がつくこともあり、発作が止まります。本当になおったのかどうかわかりません。

公害認定制度は、ちょうど10年前（1988年3月）になくなりました。なくなったその日から公害患者は出なくなるということではありませんので、その後も同じ症状の人も出ていますが、認定がないので、何人ということとはわかりません。

12. 四日市ぜんそくは、公害がなくなったらなおるのですか？

ほっさの回数がへったりして楽になりますが、肺のさいぼうがこわれた患者さんは、なおることにはなりません。一度こわされた自然はもとにもどらないと同じだと思います。

13. 四日市ぜんそくの薬などはあるのですか？酸素吸入器がないとどうなりますか？

四日市ぜんそくということではなく、ぜんそくの薬はあり、次々と新しい薬が作られています。のんだほうがいい薬、のまないほうがいいけどほっさによくきく薬（心臓に負担がかかる）とか、ほっさで苦しいので、吸入をやりすぎ、そのために死ぬ人もいます。

とくに、肺きしゅの人など、呼吸が苦しいとき、酸素吸入がないと命を縮めることもあるようです。

14. 今と当時を比べて、空気はどれくらい違いますか？きれいになりましたか？

公害裁判で患者側が勝ったので、県や国は、けむりを出す規準をきびしくして工場に守らせるようにしました。二酸化イオウは、もう心配のないところまでよくなりましたが、二酸化窒素（にさんかちっそ）は裁判のころと変わっていません。また、地球温暖化の二酸化炭素（にさんかたんそ）はたくさん出ています。

15. いまも煙突から出ているけむりは、だいじょうぶなのですか？

煙突から出ているのが見えるのは水蒸気ですが、「にさんかいおう、にさんかちっそ、にさんかたんそ、ふんじん」、といったものは目に見えないだけで、出されていることには変わりはありません。

16. コンビナートのタンクの中にはなにが入っていますか？

まず、四日市港の沖合い数キロのところにある原油荷揚げのシーバースから、巨大タンカーが陸地の原油基地のタンクへ原油を送ります。

製油所は、その原油を分解するプラントにいれ、360度の蒸気で、ガソリン、ナフサ、灯油、軽油、重油などに分解し、それぞれのタンクにおさめます。球形のタンクには、プロパンガスなどの気体をつめています。

17. 今も四日市では環境保全は続いていますか？市役所としては何かしていますか？

10年前、公害病認定制度がなくなったとたん、公害対策課をなくして環境保全課としました。「公害対策は永遠の課題だ」と言っていますが、認定制度がなくなったあと、ぜんそくの発生などの調査もしていないそうです。

1996年、四日市市制100周年の前の年、市立博物館で、「公害展」を1ヶ月間ほど開きました。サブタイトルには、「公害の町から、環境の町へ」とうたわれていました。公害はもうさようならです、これからは環境の時代なのですと言わんばかりです。

18. いまは、ぜんそくにかかる心配はありませんか？

現在、ガスがゼロになったとしても、とくにお年よりは、これまで長い間、ガスにさらされていたことでもあり、ぜんそくにかかる心配があります。公害認定患者のところへ、同じような症状の人が相談にきていますが、認定制度がなくなってしまったので、医者代も自分で払わなくてははいけないし、手当金ももらえないというのは、おかしなことだと思います。

19. 工場の人でもぜんそくにかかったのですか？

かかった人はいます。会社をやめたあと、かかるかどうか心配されています。

四日市公害裁判 原告患者 野田さんの「伝えたい思い」

1999年、10月22日、塩浜小学校で、社会見学（公害学習）に訪れた小学校5年生の質問に答えたときの話

みなさんの質問に答えたいと思います。

油くさい魚はどれくらいくさかった？

これは、油臭い魚って食べたことない？この魚臭いというのはね、要するに、油とかゴミとか今の化学洗剤とかに汚染されたものだからね。洗剤のにおいと油のにおいがついてね、ちょうど、あんたたち軽油のにおいって・・・・？においはあんな感じ・・・・臭いさかなをもし食べたかったら、今でもまだありますもんで、言ってもらえれば食べてもらえます。

溶けたスクリュウを見てどう思った？

かねが溶けたということは、硫酸なんかやとかかねが溶けるわな、石原産業が公害裁判中に摘発されて、裁判に負けて、賠償金支払ったという石原産業というのは、硫酸を海に垂れ流しとったわ。だからね、その付近を航海したり、そんな近くで漁をしとったりすると、船のスクリュウなんかもろにやられてしまう。溶けたというより、くさったんやね。で、その付近の家でも、昔はみんなとたんの雨どい。雨どいなんか1年もたんだ。みんなくさっててね。これというのは、イオウというか硫酸というか石油精製に対して、イオウが副産物としてできた。今は、脱硫装置なんかつけて、ちゃんととってますけど、その当時は、垂れ流してほりっぱなしやから、硫酸の雨がふとった。だからねえ、くさってくるわ。船のスクリュウがくさってくるというのは、要するに、わしら、自分の足がくさってくるんやで。いったいどうなんのやろと、もうそのうち伊勢湾に生きたもんおらんようになってしまいうんじゃないかと心配があったけどね。その当時の漁師にはね、どうすることもできやんだんや・・・・・・

海はどれくらい汚れていたのか？今でも汚れているか？

ボラやスズキなんかはね。今でもたくさんとれるけど、当時のイメージがあるから、この付近の人は、今でもボラは食べません。ボラが一番臭かったからね。そのボラがね、手づかみできるほど捕れとった。要するに、ボラを捕る人がおらんから、ボラも逃げやんだわけ。極端な話するとね、そのへんのみぞにね、変な魚がうようよしとるわね、あれと一緒にねえ、・・・・汚れとったと。どれくらい汚れとったかという、まあ、なんていうか、海というのは、海底があって、砂があって、泥があって、その砂や泥の中に、シャコとかエビとかが生息しとったわね。今はやかましい言われとるけど、当時は、ポイ捨てやね。それが、川に流れて、海に流れて、下で生活しとるシャコやエビの上にかぶる。そしたら、エビやシャコは死んでまうわな。頭から鉄かぶせられるんやで、死ななしゃあないわねえ。

まあ、そういう形で海が汚れた。現在、この広い伊勢湾でも、鈴鹿、白子付近から、だいたい名古屋のへんまで、もうほとんど伊勢湾は死んでます。私はこれ漁師してますけど、朝3時に起きて白子より1時間も1時間半も高い燃料たいて行って、そこで、漁をして帰ってくるんやから、ま、地図の上では広い伊勢湾やけども、この伊勢湾は、半分死んどる。要するに、人間が回復させるには、まず、不可能かしらと今の時点で私は、そういうふうに思います。だから、今後の課題として、若い子供さんたちが、関心もって、この汚れた海をきれいにしてくれることを私は、期待しています。

ぜんそくはどんなに苦しかったか？

これはねえ、よく私ら、どこへ行っても質問されることや。あんたたち、小児喘息やったことある人おる？

そのぜんそくになった人にたずねるんやけどねえ、どんなふうに苦しかった？

こきゅうすんのがくるしかったやろ、あんたたちに質問するけど、生まれてから5年生になるまでの間に人間生きていく以上は、呼吸せなあかんのや。息吸うたり、吐いたり、24時間ずっと呼吸するやろ、いつときたりとも休めやんのや。でも、この息を吐いたり吸うたりとい



うことをね、あんたたち、意識して呼吸したことっていつでもある？無意識のうちに『すー、はー』って、吸うたり吐いたりして、生活しとるやろ。寝とるときでも自然としとるはずなんや。でもねえ、ぜんそくになるとねえ、この吸うたり、吐いたりするのが非常にえらいの。これねえ、注射打ってもらったら直るの。注射打ってもらうまではえらいから、『これなあ、俺、死ぬまでこんな苦しい息せんならんのやったら、もう死んだろかしらんと』まず自殺した人はこれに負けて、自殺したと思うし、私は、これ、相当野暮ったい、がむしゃらな人間やったんやけど、時々、あの一、発作がひどいときには、『俺、死ぬまで、こんな苦しいきせんならんのやろか、えらい病気やなあ。こんなえらい病気ないなあ。』と思たねえ。

ぜんそくの苦しみて一口で言うとそういう形。

だから、どういうふうに苦しかったかというのと、説明、これ非常に難しいわ。そのそう(人、年れい)によって違うから。大人の私ら、その当時30歳代や。20かん、100キロくらいのも腕でさしあげよったけど、そのくらい力があつたけど、それでも、苦しいから、玉の汗かいて苦しんだ覚えがなんべんかある。

そして、やっと気がついたときには、先生が注射打ってくれて、あっ、またこんで助かったんやなって思ったこともなんべんかある。

ぜんそくの苦しみて一口で言うとそういう形。

でもまあ、一つ救われることはねえ。塩浜病院ていう空気清浄病室に入院しとるからね、そこへ入って、発作止めの注射打ってもらって、打ってもらうと5分もせんうちに息できるんや。だからねえ、これ助かったわと思てねえ、苦しい中にもおさえる注射があつたか

ら、私ら救われたし、そいで、ある程度、樂觀しとったというのもある。苦しいのには違いないけどね。でも、手や足切って、痛い痛いというとるんじゃなくて、注射を打つてもうたら、直ってくというそういうこともあったから、まあまあ苦しみのなかでも救われることがあったかなあ。

仕事ができなかったときの気持ちは？

大人にならなわからんと思うけどもね、私は、一応、家庭人やで家庭を持って女房や兄弟をやしなって生活しとったんやで、仕事ができやんとなると、これ非常に寂しい。ほんでねえ、なぜ、おいらはこんにね苦しめられて、仕事ができやんのやってみず第一番目に思う。その気持ちを教えてくれといわれると、今では、遠い過去のことのようと思われるけど、なんかねえ、目の先が真っ暗になってねえ、これは、いったいどうしたことや。俺の一生しまいかいなど、これ、ぜんそくで苦しめられて仕事ができやん、苦しめられて、こんな病院で生活せんならんなあ、俺の一生は終わりかいなど思た。まあまあ、それにつきるねえ。だから、そのときの気持ちっていうたら、これもたとえようがないなあ。これはみなさんが大人になったら分かると思うけどね。そういうあの、・・・この気持ちは、苦しいときやなけりゃ分からんと思う。

どれほど毎日が大変だったか？

これはねえ、私らねえ、あの、四日市とかねえ、行政の方が一番先ばなやったかな。だからねえ、公害でくるしんどる人はねえ、あの、治療だけは受けなさいよと、面倒はみてやるという形でねえ。やってくれた。だからねえ、治療はできる、ぜんそくのね。でも、生活の面倒まではしらんと、これは今でいう社会福祉の人がねえ、わたしところへ調べにきてねえ、生活保護うけんのに、おまえらこれどんな生活しとんのや、ちゅうようなこというてきた。だけど、私はそんなとき、なにいうとんのやと、わしらをこんな病気にさせといてやなあ、・・・昔の漁師だつてなあ、おまえら役人の世話になる必要ないのやしなあ、おれはする気にはなれやんと、おまえら勝手に福祉で生活みたるっていうんやったら、おまえら勝手に調べてけ、おれはそんなん受けたい人間やないわい。そんなん、あてにしとらんわってねえ、福祉の人追い返した覚えがあります。



だからねえ、この病院に行ったらねえ、病気は、助かるんやから、注射を打つて直るし、そして、幸いにして漁師やもんでねえ、この伊勢湾の南の方に行ったり、広い海に行けば、空気が正常であるから、そこで、仕事するには、なんの支障もおこさんし、私らも今まで通り仕事できるから、先生たのむで仕事さしてくれ、うちのもの養っていくのに生活できやんやないかということで、当時の先生のご了解を得て、そして、朝三時になると看護婦さんに起こしてもらって、病院のベットから抜け出して、うちへ帰って、うちの女房に弁当作ってもらって、それを持って、船に乗って、漁に出ていた。そして、夕方まで働いて、

帰ってくる。うちへ行って、風呂に入って、晩飯食べて、やれやれと思う。先ほど、昼間は漁に出るといふけれど、日中は、硫酸や亜硫酸ガスやそんなもんは、上へいっとるけども、空気が冷えたりなんかすると下がってくるんかなあ。だからねえ、(発作は)朝晩に多いんや。この土地の人はねえ、会社ちゅうのは、昼中はある程度そういうものださんといふて、夜になるとそういうもの出すといふねえ、そういう偏見か事実かしらんけども、そういう言い方をされとった。そして、やっぱりねえ、事実夜中とか夜明けとかが発作が多かった。だから、仕事から帰ってきて、体休めると発作が出る。これはもう家では寝られやんわとほいで、病院飛んでいって、今は健康センターになっとるけど、空気清浄室っていってねえ、これぐらいの部屋で、12人くらいおったかなあ、本当は6人(部屋)ですけど、場所は、これぐらいにずっと、12人くらい住めたわねえ、空気清浄室ってねえ、浄化したきれいな空気があつてねえ、きれいな空気のなかで私ら守られとる、安心して寝られるわけ、そうして、夜が明けるとまた、看護婦さんに起こしてもらつて漁に出ていったと。だから、そういう形で仕事に行くことができたといえるわね。

まあ、毎日がどれほど大変だったかといふと、まずはねえ、一般の人は、土曜日、日曜日といふと、家族を連れて遊んだりなんかしたけど、私らは、昭和30年代後半から40年代といふのはねえ、24時間何にもなかった。ただ、病室と家の往復でね、このまま終わったら死んでいくしかない。死ぬのをまっとるだけやけど、でも、このまま死んではいけやんし、かといふて、家族を守る義務もあるし、悲壮感といふかそういうねえ、先の見えやん暗い生活がねえ、約十年以上続いたかな?だから、裁判に訴えたといふこともいえるやろう。

工場や企業や行政にどんな気持ちでいたか?

昔私らが生まれたときは、ここは田園地帯で、百姓と漁師が生活しとってさ、だからねえ、公害といふものは何にもなかったんやね。ところがねえ、工場ができたわけ、この工場ができた時点ではねえ、私らこの地域の人は、非常に喜んだ。大きな工場ができるんやないか。日本の中心になる三菱やそんなんがきてくれて、大きな工場を造ってくれるんやと、こりゃあ、四日市も大都会になるんやと喜んだけど。でも、その当時、この工場の建設に携わった外国の技師の人がねえ、『あんたたち極端に喜ぶけれども、工場できたらこの土地で生活できへんぞ。』『なにいうとんのやおまえ』ていうたらねえ、『ほんとにねえ、こういう工場っていうのは、アラビアの原野で石油を精製しとった工場をそのまま持ってきてとったらいへんやから、こんなもん人が住んどる真ん中にきて建ったら、周りの人は住んでおれるのか』と、『そんなばかなことあつかあ、これは、あのひとのやっかみや』ってねえ、私らいうとった。鼻で笑わらとった。

でも、4,5年先には、こうやって、公害が現れてきた。ところが、私らぜんそくになる、何にもなかったところにこんな公害が出てくるっていうことは、工場や。そいで、自治会にいうて、工場に訴えに行ったら、『うちじゃない』また次の会社に行ったら、『うちじゃない』次の会社に行っても『うちじゃない』そういつたら、いったいどこやと、ねえ、私そのときに非常に残念に思ったことはねえ、『うちじゃない』といふことはねえ、『俺じゃない、おまえだ』といふことといっしょや。罪を人になすり合いするその根性に

ねえ、本当に私は頭にかちんときた。『よしそうかおまえらそんな気持ちか』と。それで、今度は、行政に行った。『こんな、俺しらん、工場のいうとることは俺は、しらん。国の規制をちゃんとまもつとる工場が操業しとんのやから、俺はしらん』と。『ほんとにいったいどこへ行ったらええのや。俺は知らん、俺は知らん。』そうこうして悩んでおるときに、ここに居る澤井さんとかそういう善良な人に、『おまえら、そんなにくるしんどんのやけど、こういう助かる道があるんやぞ。』と法律があるから、その法律に照らし合わせてみなさいと言われて、そうかと、どうせあかんもんならな、いっぺん裁判、日本の国に法律があったら裁判に問おうじゃないかと、まあ、そういうようなことで、裁判を起こす気になったから・・・・・・・・

裁判に踏み切ったときの気持ちと裁判をしていくときの苦勞は？

そういう矛盾したなかで、私らがねえ、生きていくためには、この道しかないやないかと、もしな、裁判に負けてもええやないかと、裁判に負けたらしょうがないやないかと、だからねえ、地域の方は、大きな日本の国を相手にして三菱やこんなんを相手にして、そんなん勝てるかと、みんなせせら笑った。でも、私らとしてはねえ、この方法しかないやないかとね。これ、選ばなしゃあないわね。まあ、こういう気持ちでねえ。裁判起こした時点では、裁判に勝てるという気持ちは、これっぽっちもなかった。だからねえ、はっきりいうて私らも意地としてねえ、裁判の最中で、企業が『俺んところかもわからん、俺が悪かったな』という、一言わびが入ったら、裁判を取り消したかもしれんしね。まあ、そんな中で、裁判が進んでって、まあ、なんていうか、まわりの人らが裁判を進めてくれたから、私らでは、そんなことできへんからな。だから、そういう形で裁判を闘ってきた。だから、裁判に協力してくれた人たちには、いまだかつて、頭が上がり、はっきり言って。でも、この人たちが、何がためにこうしてくれたかと言われると、その当時としては、おせっかいやおひとよしとしか私は思わんだ。でもね、今思うとその人らはね、このまま大事な地球をね、人間のエゴで勝手に汚していくやないかというね、そういう危機感に立ってね、考え、これはやっぴし、頭がある人らは違う。我々の知恵やったら、このまま地球を汚し続けて、近い将来、地球は滅びてしまうかも分からん。でも、ええときに立て直してくれた。環境基準を守るように法律も作ってくれた。そして、企業もこんなに古い煙突ではあかん。高い煙突作れ、なにせえというてね、何千億という莫大なお金をかけた。だからね、裁判の判決としては、私らに対して、一人あたり五百万、一千万と、考えてみれば、自分の命の値段としては、あまりにも安い金額ではあったけれど、でも、企業がかけたお金のことや、地球改善に向かって整理が進められたということは、大きな意味があったなど、だからやっぴし、支援してくれた人は、こういうとこまで考えとったなあと、今つくづく私は思います。

そして、今この子どもさんたちの前で大きな顔して言えるのは、もしあんたたちがこんなしんどい環境におうたときには、負けやんと私らみたいにがんばってくれ。それで、今の子どもさんたちがわしらとっしよの道を進まんとも限らん。でも、こんなことしたらね、この二つとない地球は滅びるやろ。ねえ、私いっつも笑うのやけど、くさい魚っていうてもこのとおりのや、人間空気がくさいだけでも、小言いうて裁判起こすのにね、死んでいかんならんこのくさい魚の例にとってみても、もし、魚が裁判を起こす権利があったら、

人間は死刑やろ。『おら、天然ですんどったのに、住めやんようにしたやないか』と、もし、説教されたらそんなこともあったやろうと思う。だからね、これは、今でもよく言われるけども、戦争で負けた日本が今日にあるということは、先進国の仲間入りできたということは、こういう犠牲があったから、なった、と言われる人も多いけども、そりゃ、確かにそうやろう。当時私ら、食いもんもほんとにあらへんだし、着るもんも着やんだ、だから、海を汚したらいかんという、一番自然の中で生きとるわたしらがね、洗剤をつこて、平気で洗剤の水を海に流すでね。これは、生活悪や。だからな、そういうことやいろんなことを考えると、もしこの子どもたちにこの公害ということについてどういうふうにするたらええかと言われるけどねえ、そうねえ、この裁判を起こすときの気持ちとか裁判をしていくときの苦労というのはね、そこまでは考えやんだけども、今思うと、そういうメリットがあったでこそ、裁判は勝てたんかな・・・やっぱし司法の中にもそういうものを工夫しとる人もおったし、我々みたいにもし、ふびんなものを救うために、この裁判、勝てたんかというて決してそうじゃない。だから、日本の政治が、経済が発展するために、無理矢理進めたという政治であったから、直すために、この日本を助けてくれたとも考えられる。そういう意味においては、四日市は公害裁判の原点とか何とかと言われるけど、でも、私らとしては、そんなたいそれた夢を持ってやった裁判でもないし、ただ自分が助かりたいために、このままおっても死んでくやないかという中で、この裁判を起こしたいうようなわけであるから、一般の遠い地域の人たちが評価してくれるような私らは英雄でもないし、良心があったというわけでもなかった。まっ、でも、今、そういう観点からみれば、やっぱりそういうこともあったかなあとも思いますねえ。だから、裁判に協力してくれた人には、私ら終生頭が上がりらん。

裁判に協力してくれないまわりの人、親戚の人には、どんな気持ちでいましたか？

自分が助かる以上は、人が死んでいくのはやむをえんやろう、これは、漁師町のねえ、ルールとしてね、『隣が苦しめば、自分がもうかる』というねえ、これは漁師町のルールであるから、だから、隣が苦しんどるのぐらい、、まあ、俺も考えやんだし、親戚もそうだったかもしれん、でも、そんな社会の中で生きてきた私らは、そんなことはあんまり認めやんだ。

裁判に勝ったときの気持ちはどんなだったか？

当時はねえ、裁判に勝ったと、助かったという気持ちじゃなくてねえ、やれやれ、おいらの言い分にやっと認められたなと、こんによくなるとは思わんからね、『助かった』というねえ、意識はまだなかった。でも、おいらの言い分もおるんやなど、だからな、これ、やっぱし、大学の先生たちが、口を酸っぱくして言うな、『裁判して良かったなあ』、『やっとこの裁判のために、おいらの言い分も通ったんやなあ』と、当時はそう思いました。

でも、20年たち、30年たつと、今、30年たった今日、みなさんの前で私は、大きな顔をして、とてもこんな元気な姿で、みなさんに話すなんて、私は夢にも思っとらんだ。

だから、今、はっきり言えることは、協力してくれた人らに、『助けてくれてありがとう』と言いたいのが私の本心です。だから、今もって、支援団体の方たちは、わたしら

の命の恩人やということ、肝に銘じて忘れやん気持ちであります。

余談になるけどねえ・・・

私らこの小学校から、うちに帰るのにねえ、鈴鹿川を渡って帰るんや。7月のねえ、産卵期になるとねえ、こんな、カニやカレーがねえ、川で踊っとる。それを学校の帰り、5年生くらいって言うたら、あんたらぐらいや。パンツ一枚になって、川ん中、そんなもん、カニを5, 6っぴきとってさ。『おい、おっかあ、こんばんのおかず炊いてくれ』って言って、カニやカレーを炊いて食べたことある。

あんたら、カニやカレーって食べたことあらへんやろ。おいしいのやで、あんたら、ハンバーグや何たらばっかりくっとならへんやろ。そんなん、丈夫な子にならへんぞ。

「おいしいよ。カレー」

「ほう、でも、生きたこんなカニ、食べたことあらへんやろ？そんなカニが捕れたんやで。」

「躍り食いせなあかん？」

「そうや、躍り食いせんならんだ。そんなな、日本の国って言うのは、そんなええ国やったんや。このまま会社にしておくと、また地球を壊してしまう。地球を壊してしもうたら、猛毒マスクはめて勉強せんならんなんて、あんたらの子どもがそんな目にあったら、はりあいないやろう。なっ、学校から帰ってきたら、セミとったり、トンボとったり、お前ら、クワガタ買うやろう、クワガタやカブトムシ買うやろう、そんなん買わんでもいっばいおるんやで。」

「おるよ。」

「おう、あんたとおるやろう、でも、今、ここ探そうと思てもおらへんやないか。それも、公害のためやで。なっ、これ、ここ、ずーっと大きな松林やったんやで。大きなこんな松が枯れたんやで、公害で。公害って、そんな恐ろしいもんやで。なっ、だから、お前ら、おじさんの話聞いてな、自分の小学校の近くで、こんな話が出たら、絶対反対せなあかんのやに。まあ、ひとりでも分かってくれりゃええけど・・・。」

「うん、分かってる。」

「まあ、そういうことやで。」

「ありがとうございました。」

雑談へ

・・・「おじいちゃんと、いっしょ・・・」

「おじさんもう70歳やで」

「裁判の時は何歳やった。」

「裁判の時は、30くらいや、あんたのお父さんと同じくらいやろ？ちゃうか」

「40くらい。」

「ああ、そうか。」・・・・・・・・・・・・・・・・